

ベランダバードウォッチ 2022 年冬調査報告

バードリサーチ・日本野鳥の会栃木県支部

2023 年は一気に春が駆け足で訪れたかと思うと、すでに窓から見える景色は初夏のような気配が漂っています。今年も早くも 4 月下旬に入り、夏鳥たちの便りが届く季節になりました。つい 2 か月前の戸外の様子が思い出せないほどです。気象庁発表の 2022 年 12 月から 2023 年 2 月（以下 2022 年冬）の天気概況によると、北日本日本海側では寒さが厳しく積雪も多かった一方で、西日本では雨が少なく気温も高い冬だったとのことでした。このような気象状況下で、身近な鳥たちの生息状況はどうだったのでしょうか。積雪の多かった北日本の日本海側では積雪のために冬鳥が少なかったのでしょうか。一方、積雪の少ない関東地方や西日本などではツグミやシメ、アトリなどは多かったのでしょうか。以下に 2022 年 12 月から 2023 年 2 月末までの調査結果から、身近な環境での鳥たちの生息状況についておもに冬鳥の記録状況を報告いたします。

調査状況

2022 年冬の調査は、北海道から九州までの合計 63 名によって、家での調査が 39 か所、家の周りの調査が 41 か所で行なわれました（図 1）。昨年と比較すると、家での調査は 4 か所増加した一方で、家の周りの調査は 1 か所減ってしまいました。家での調査地数は昨年に比べるとやや増加しましたが、調査地の中には調査が 1 回のみでの調査地も多いことから、調査状況は今年の冬とほぼ同じと言えます。地域別では今年も関東地方が多く、両調査を合わせると全体の約 58% を占め、地域ごとの実施状況は昨年冬の調査と同様の傾向にありました（図 2）。北日本での家の周りの調査地が少ないのは、やはり冬は厳しい寒さが影響しているのかもしれませんが、嬉しいことに今冬は、家での調査では東北・北海道の調査地がやや増加しました。

記録種

付表に、2022 年 10 月から 2023 年 2 月末（家での調査は 12 月 1 日から）までに記録された種をまとめました。22 年冬の調査では家での調査 57 種、家の周りの調査 106 種で合計 109 種（種不明を除く）が記録されました。それぞれの調査で記録された種数は、昨年の調査で記録された種数とほぼ同じでした。家での調査と家の周りの調査は調査期間や調査回数が異なるため、記録された種数は 2 倍ほど違うものの、それぞれの調査での種構成は調査年であり違いがないことがわかっています。すなわち、調査範囲が広い家の周りの

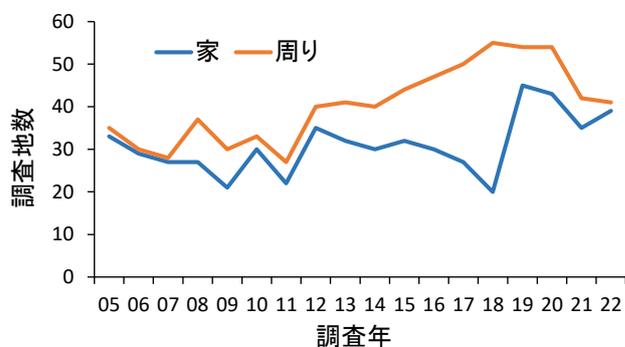


図 1. ベランダバードウォッチの調査地の推移

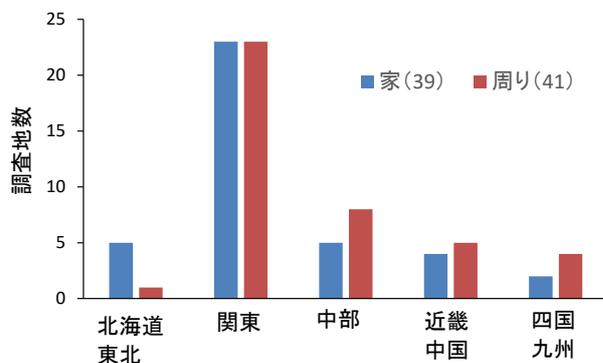


図 2. 2022 年冬の調査の地域別調査地数

調査では家での調査よりシギ・チドリ類やカモ類、サギ類など水辺の鳥が多く記録されるとともに、調査期間が 10 月から始まるためツバメやキビタキなど夏鳥も記録され、多種多様な種構成になっています。

表1. 家での調査と家の周りの調査の直近の2年間の記録率の比較

No.	家での調査			家の周りの調査				
	2022年冬		2021年冬	2022年冬		2021年冬		
1	ヒヨドリ	0.76	ヒヨドリ	0.71	ヒヨドリ	0.98	ヒヨドリ	0.95
2	スズメ	0.65	スズメ	0.60	ハシブトガラス	0.82	スズメ	0.85
3	ハシボソガラス	0.35	ハシブトガラス	0.47	スズメ	0.80	ハシブトガラス	0.80
4	ハシブトガラス	0.30	ムクドリ	0.41	シジュウカラ	0.72	シジュウカラ	0.69
5	キジバト	0.26	ハシボソガラス	0.33	キジバト	0.71	ハクセキレイ	0.68
6	ムクドリ	0.24	メジロ	0.32	ハクセキレイ	0.70	メジロ	0.68
7	メジロ	0.22	キジバト	0.31	ハシボソガラス	0.68	キジバト	0.67
8	ハクセキレイ	0.19	シジュウカラ	0.19	メジロ	0.68	ハシボソガラス	0.63
9	シジュウカラ	0.17	ハクセキレイ	0.18	ムクドリ	0.53	ムクドリ	0.60
10	ツグミ	0.14	ジョウビタキ	0.14	ドバト	0.50	ドバト	0.51
11	ジョウビタキ	0.14	ツグミ	0.13	モズ	0.47	モズ	0.47
12	モズ	0.12	ドバト	0.10	ジョウビタキ	0.44	ジョウビタキ	0.41
13	ドバト	0.09	シロハラ	0.08	ツグミ	0.36	カワラヒワ	0.35
14	シロハラ	0.06	カルガモ	0.07	カワラヒワ	0.35	ツグミ	0.33
15	カルガモ	0.05	モズ	0.05	ウグイス	0.35	ウグイス	0.33

記録率は各調査とも記録回数をそれぞれの全調査回数で除した値。

主要な種の記録率の比較

表1は、22年冬の両調査の記録率上位15種を比較したものです。記録率の算出方法は、各種の記録された合計回数をそれぞれの調査の全調査回数で除した値です。また、22年冬と21年冬を比較するために21年冬の記録率上位種も併記しました。この表をみると、調査地は両年で若干異なっているにも関わらず、両調査の記録率上位15種の顔触れは同じでした。さらに、22年冬と21年冬の上位15種は多少順位が異なるもののやはり両調査とも同じでした。このような記録種の傾向は、20年冬などからも見てとれます。調査地は関東地方が多いものの北海道から九州まで広く分布しています。これらのことから、身近な環境での主要な鳥の生息種はほぼ全国的に似たような傾向にあることが見てとれます。そして、これらの種が日本の身近な環境を代表する種と言えます。一方、記録率をみると家での調査では、上位8種以降は両年とも急激に記録率が低くなる傾向があります。これは、家での調査では家の周りに比べて調査範囲が狭いことや調査回数が少ないことで、単独で行動する種では記録される頻度が著しく少ないことが理由と思われる。

冬鳥4種の記録率の季節変動

図3は、3シーズンにわたって調査が実施された家の周りの調査地の全国22か所における、身近な冬鳥4種の10日毎の記録率の推移を表したものです。ジョウビタキは、12月以降に多少記録率が年によって変動するものの、3シーズンとも渡来初期に高い記録率を示したのち、11月下旬ごろから次第に低下し、その後2月に

かけて変動する傾向がありました。これは、本種では縄張りが確立されるとあまり鳴かなくなることや、縄張りを占有できなかった個体は他所へ移動してしまうことなどで、記録率が低下するものと考えられます。一方、ツグミやシロハラ、シメでは、渡来当初から2月にかけて徐々に記録率が変動しながら増加する傾向がみられました。そして、これら3種ではジョウビタキなどより年

によるばらつきが多く、記録率が高い冬と低い年がありました。本報告の20年から22年の3シーズンでは、3種とも20年冬の記録率が他の2年より高い傾向がありました。年による記録率の違いは、おもに調査地への越冬個体数の多寡の違いを表していると考えられます。とすると、ツグミやシロハラ、シメは20年冬には21年および22年冬より何らかの理由で渡来数が多かったのかもしれない。これを裏付けるように、3シーズン調査が実施された家の周りの調査地による個体数ランク別の記録件数でも2020年冬のツグミとシメは2021年や22年より記録件数が多いことがわかっています(図4)。

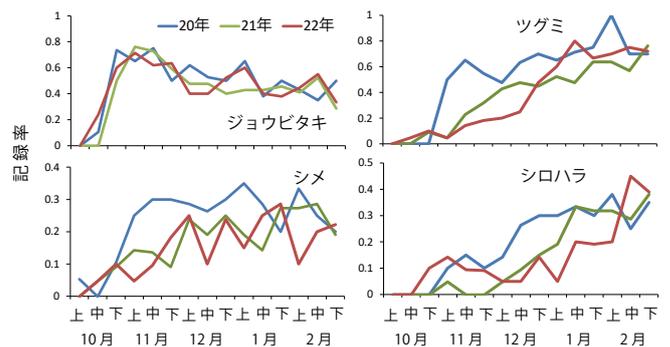


図3. 家の周りの調査による冬鳥4種の記録率の比較

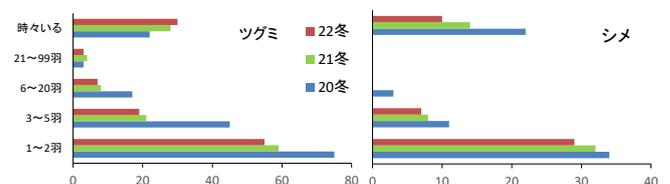


図4. 家の周り調査によるツグミとシメの個体数ランク別の3冬の比較

家での調査による3シーズンの記録状況

図5は、3シーズンにわたって調査が実施された家での調査地19か所におけるツグミ、ジョウビタキ、カワラヒワ、メジロの平均個体数の年ごとの比較です。生息が記録された調査地数は、年による違いが少なく、種によってある程度決まっています。記録された調査地が多い種は、ツグミやジョウビタキ、メジロで、記録地が少なかったのはカワラヒワでした。カワラヒワは冬季に群れで行動することが多いため観察者の目に付きやすいと考えられがちです。しかし、ペランダバードウォッチの調査では記録された調査地は少なく、やや意外に思われます。これは、家での調査地は市街地の住宅地付近を調査地としていることが多いため、冬季にカワラヒワの食物となる木の実や雑草の種子が少ないためではないかと思われます。一方、記録された調査地が多いほかの3種は、昆虫類やミズズなどの小動物やウメドキやモチノキなどの木の実、花の蜜(メジロ)など多様な食物を食べるために、冬でも住宅地周辺にも普通に生息していると考えられます。

生息が確認された調査地が多かったツグミ、ジョウビタキ、メジロの3種の調査年ごとの記録個体数の状況を比較してみました。するとツグミとメジロの個体数は家の周りの調査と同様に、2020年冬に多く記録された調査地が多くなった一方で、21年冬や22年冬では少なかったことがわかりました。なお、ジョウビタキは3年間で多少違いがあるものの記録個体数の多寡はあまり違いがありませんでした。ジョウビタキは冬でも縄張りを占有するため、年ごとの生息数はあまり変動しないのかもしれませんが。

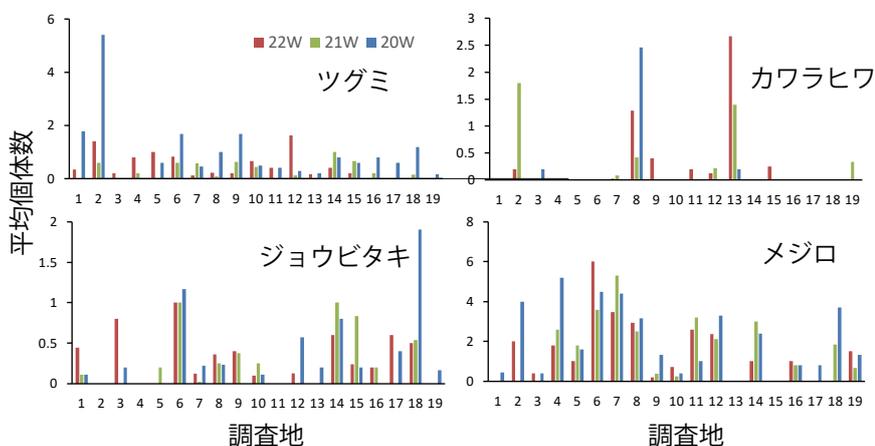


図5. 家での調査による調査地ごとの平均個体数の3冬の比較

2022年冬のみ

以上のように、2022年冬では家での調査および家の周りの調査とも、ツグミやシロハラ、シメなどの冬鳥は2020年冬などと比べると記録率や記録個体数がやや少ない傾向が得られました。アトリ科の鳥たちの主な食物は樹木の種子やズミなどの実です。こうした植物の種子の豊凶は1年ごとに交互に変動する傾向があります。とすると、今冬は、ケヤキやカエデ類、山地のズミやアズキナシなどの木の実が少なかったのかもしれませんが。実際、関東北部のペランダバードウォッチの調査地の公園では、ケヤキやカエデの種子が皆無だったことがわかっています(平野未発表)。ただ、2021年冬も記録率が低いことから、何らかの理由で繁殖地での繁殖成績が悪かった可能性も考えられます。冬は年によって渡来数が著しく変動します。渡来状況の変動を把握するとともに、彼らの食物となる植物の種子の豊凶などを合わせて記録することも、こうした鳥たちの渡来状況の変動との関係を明らかにする上で重要と思われます。最近はスマートフォンのカメラも性能が良くなっていますので、野鳥観察の際に木の実の生り具合を撮影しておくのも貴重なデータになると思われます。

さて、22年冬が不作だった地域は23年冬には木の実がたくさん結実する可能性があります。はたして、来シーズンの鳥たちの渡来状況は多いのでしょうか。今から気になります。ぜひ、今後とも継続して調査にご参加いただければ嬉しい限りです。なお、取りまとめでデータを拝見しますと、一部データの入力の仕方が誤っている方がいらっしゃいました。家の周りの調査は10日に1度記録した個体数の概数を入力します。入力方法

が間違っていると、せっかくの貴重なデータが解析の際に除外されてしまう場合がありますので、再度各調査の入力方法や調査方法をご確認いただけましたら幸いです。末尾ながら、本調査にご参加いただきました皆様のご芳名を以下に記してお礼に替えさせていただきます。

秋元玲子, 秋山洋佑, 渥美美保, 天沼弘勝, 飯泉 仁,
五十嵐勉, 石田健, 石原渉, 入船憲一, 大出水幹男, 大
井智弘, 大塚啓子, 小川泰生, 小川結衣, 沖田絵麻, 加
藤美奈子, 川田みゆき, 川畑紘, 黒沢令子, 黒田航世,
神山和夫, 後藤未央, 小林尹夫, 小林俊子, 近藤盛文,
坂口明子, 坂田樹美, 坂田順子, 桜田亜希, 笹倉千江花,
佐藤一博, 佐藤司, 佐藤留美子, 嶋田昌行, 鈴木利幸,

須田由美, ソウザキマユミ, 大門明美, 大門聖, 高橋佳
子, 滝澤三郎, 武居佳子, 武谷由紀子, 辰巳文吾, 田中
利彦, 田中勉, 長嶋宏之, 西川光一, 西田好恵, 丹羽和
夫, 野村英樹, 林田治也, 東出幸真, hikimiriver, 藤原
淳子, 三田長久, 三藤文彦, 宮崎朋子, 安田耕治, 吉中
康展, 吉邨隆資, 渡邊宏之の各氏 (五十音順)

とりまとめ: 平野敏明

付表. 記録種一覧

No.	種	家	周り	No.	種	家	周り	No.	種	家	周り
1	キジ		○	38	ハマシギ		○	75	ゴジュウカラ		○
2	マガン	○		39	ユリカモメ		○	76	ミソサザイ		○
3	オカヨシガモ		○	40	ウミネコ		○	77	ムクドリ	○	○
4	ヨシガモ		○	41	ミサゴ	○	○	78	トラツグミ	○	○
5	ヒドリガモ		○	42	トビ	○	○	79	シロハラ	○	○
6	マガモ		○	43	ハイイロチュウヒ	○	○	80	アカハラ		○
7	カルガモ	○	○	44	ツミ		○	81	ツグミ	○	○
8	ハシビロガモ		○	45	ハイタカ	○	○	82	ルリビタキ		○
9	オナガガモ		○	46	オオタカ	○	○	83	ジョウビタキ	○	○
10	コガモ	○	○	47	ノスリ	○	○	84	ノビタキ		○
11	ホシハジロ		○	48	フクロウ	○	○	85	イソヒヨドリ	○	○
12	キンクロハジロ		○	49	カワセミ	○	○	86	キビタキ		○
13	スズガモ		○	50	コゲラ	○	○	87	スズメ	○	○
14	カイツブリ		○	51	アカゲラ	○	○	88	キセキレイ		○
15	カンムリカイツブリ		○	52	アオゲラ	○	○	89	ハクセキレイ	○	○
16	キジバト	○	○	53	チョウゲンボウ		○	90	セグロセキレイ	○	○
17	アオバト		○	54	ハヤブサ		○	91	ビンズイ	○	○
18	カワウ	○	○	55	サンショウクイ	○	○	92	タヒバリ		○
19	ゴイサギ		○	56	モズ	○	○	93	アトリ	○	○
20	アオサギ	○	○	57	カケス	○	○	94	カワラヒワ	○	○
21	ダイサギ	○	○	58	オナガ	○	○	95	マヒワ	○	○
22	チュウサギ		○	59	カササギ		○	96	ベニマシコ	○	○
23	コサギ	○	○	60	ハシボソガラス	○	○	97	ウソ		○
24	クイナ		○	61	ハシブトガラス	○	○	98	シメ	○	○
25	ヒクイナ		○	62	ハシブトガラ		○	99	イカル	○	○
26	バン		○	63	ヤマガラ	○	○	100	ホオジロ	○	○
27	オオバン	○	○	64	ヒガラ	○	○	101	ホオアカ		○
28	ホトトギス		○	65	シジュウカラ	○	○	102	カシラダカ	○	○
29	アマツバメ		○	66	ヒバリ		○	103	アオジ	○	○
30	タゲリ		○	67	ツバメ	○	○	104	クロジ		○
31	ケリ		○	68	コシアカツバメ		○	105	オオジュリン		○
32	イカルチドリ		○	69	イワツバメ		○	106	コジュケイ	○	○
33	タシギ		○	70	ヒヨドリ	○	○	107	ドバト	○	○
34	アオアシシギ		○	71	ウグイス	○	○	108	ホンセイインコ	○	○
35	クサシギ		○	72	エナガ	○	○	109	ガビチョウ	○	○
36	イソシギ		○	73	メジロ	○	○			57	106
37	オジロトウネン		○	74	セッカ		○				